

## 教育課程部会の当面の検討課題（例）における論点 についての主な意見

【「基礎・基本」の徹底、「自ら学び自ら考える「力」の育成」について】

○ 国語	2
○ 社会・地理歴史・公民	4
○ 算数・数学	6
○ 理科	9
○ 外国語	11

主な論点の柱	現状と課題	教育課程部会、専門部会での主な意見
<p>すべての子どもたちに身につけさせたい知識・技能等の徹底                      (「基礎・基本」の徹底)</p> <p>① 「基礎・基本」の具体的な内容</p> <p>② 「基礎・基本」を徹底するための指導方法、補足的な指導の必要な児童生徒への教育の在り方</p>	<p>○ 教育課程実施状況調査において、漢字の読み書きなど基礎的・基本的な内容の通過率は、前回との比較で上昇。</p> <p>○ 国際調査（PISA）において、文章や資料の解釈に課題。</p> <p>○ 教育課程実施状況調査において、叙述に即して自分の考えや感想を述べる設問に課題。</p> <p>○ 教育課程実施状況調査において、適切な語句の選択、文の効果的な使い方などに注意して聞くことに課題。</p> <p>○ 人の話を聞く姿勢が全然できていない子どもが増えてきている。</p> <p>○ 子どもにどのような力を育てたいかを明らかにし、目的意識や相手意識を明確にした学習指導や、対話や討論などの実践など、「伝え合う力」の育成に向けた取組が、徐々にではあるが確実に行われてきている。評価も、目標に準拠した評価や、いわゆるポートフォリオ評価という方法も出てきている。</p> <p>○ どういう言葉の工夫を行ったかをきちんと認識せずに、しゃべらせっ放し、聞かせっ放しになっている指導が非常に多い。</p> <p>○ 「書くこと」の指導は時間がかかることもあり、十分指導してこなかった面もあるのではないかと。</p> <p>○ 「読むこと」を中心とすると、ただ「教材を読むこと」に終わってしまう危険性がある。</p> <p>○ 書写の授業の実態として、本来の学習指導要領上の目標が非常に希薄になっている。</p>	<p>○ 入門期では、型というものが極めて重要</p> <p>○ 低学年のうちに、「聞く」ということを学ばせることが大切。</p> <p>○ 一方的な発表でなく、「何を話すか」、「どう話すか」という意識をきちんと伴った発表が重要。</p> <p>○ 表情、身振り、間といった手がかりが伝える場面では重要。</p> <p>○ 「質問する」「依頼する」などの話す、聞く活動を明示的に構造化することが必要。</p> <p>○ 日本の中では相当知力の高いグループであっても、その人たちの書く文章の論旨がたどりにくい。自己主張力や自己主張意欲とも関係するが、どのような文章、モデルが使われるべきか、望ましい国語力を見直すことが必要。</p> <p>○ 文学や情緒と関係ない、明晰な文章を書けることが重要。</p> <p>○ 音読は脳科学の研究からも大事であるとされている。</p> <p>○ 言葉は暗記であり、国語において美しい詩などを暗記させるような指導が必要。</p> <p>○ 漢字に関しては、実際はただ漢字を覚える学習にとどまっておろ、それを実際に使いこなす、漢字を使って表現するところまでは必ずしも行き届いていない。</p> <p>○ 英語教育や情報教育との関連を考慮して、ローマ字指導の在り方についても検討が必要。</p> <p>○ 日本語をきちんと書く力、漢字を理解する力、言葉を作っていく力など、子どもたちが実社会に出て求められる力を総合的にパッケージで考えることが必要。</p> <p>○ 子どもたちにまず正しく美しい日本語を教えること、日本の奥深い文化に幼いころから触れさせ、日本の伝統や世界の中での日本について考えさせることが大切である。世代を通じての共通の言葉や情緒をもつため、日本人ならだれでも読んで覚えている共通の文章（古典）を選定し、学年ごとに配置することを考えてよい。</p> <p>○ 外国語科の指導要領では、説明する、報告する、申し出るなどの言語活動の塊がリストアップされている。国語科でも必要。</p> <p>○ 一定の時間、例えば3分でまとめて自分の主張を表現できるようなことも基本的な知識・技能として必要。</p> <p>○ 日常生活の中で辞書を引くという習慣を少しでも身に付けさせるということが、語彙の豊富さ、言葉の確かさを知る意味で大切である。</p> <p>○ 漢字が書ければあるいは読めれば、新聞が全部読める、新聞が最低限読めるようになるというような実践的な目標を明らかにしていくことが必要。</p> <p>○ 子ども達の周りにどのような文字を置いていくかという文字環境の整備も必要。</p> <p>○ 言語の役割、音声の役割、文字の役割などそれらの役割、働き、機能というものについての意識をもたせることが必要である。</p> <p>○ 国語力を考える上で、(1) 漢字や文法、語彙ということばそのもの、(2) それを使って論理的に話をまとめたりするなど運用する力、(3) 言語生活場面を学校生活での言葉の教育に持ち込む「言語生活力」の三つの視点から考えることもできる。</p> <p>○ 言語活動があり、その能力をつけるといったときに目標が明確になりにくい。今やっている目標に準拠した評価を一層充実させるためにも、目標を具体的に示していくと指導しやすいのではないかと。</p> <p>○ 国語は最も総合的な教科であり、他教科との関係を体系化し、相互に発信して影響を与えることが必要。また、すべての教科を通じて国語の大切さを位置付け、各教科における文章の作成や発表、ディベート等で国語の指導を行うことが有効。</p> <p>○ 日本文学は日本人のオリジナリティにかかわるものではあるが、言語能力と論理構造という日本語を扱う技術を教えることが国語の第一義である。</p> <p>○ 日本の国語教育の教材は少し文学作品に偏り過ぎており、自分が言いたいことを相手に分からせる論旨の展開を教えるような教材が重要。</p> <p>○ 型と応用の相互関係を見ながら、力を育てることが重要。</p> <p>○ 伝え合う力の「合う」の力を育てる必要。反応の仕方、質問の仕方、受けて返す言葉の指導など、具体的なことが必要。</p> <p>○ 漢字指導は語彙指導に結び付いている。書いて確かめて、認識して、自分の血や肉にしていくことが大切である。</p> <p>○ 文法事項や言語表現を分類して示す必要。例えば、引用、比</p>

		<p>喩、接続の表現など順序だてて体系化すること。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 現在の書写の評価は、書かれた結果を評価しているが、書かれる過程を重視する方向にしていく必要がある。</li> <li>○ 西洋のレトリックを日本の教育にどう取り入れるかが課題。</li> <li>○ 解説書、説明書、パンフレット等短い文章を含め、多読が必要。</li> <li>○ 「文化審議会答申」で読書の重要性が指摘されている。精読中心の授業だけでなく、多読へ導く学習指導が求められている。</li> <li>○ 国語のおもしろさに気付かせていくようなことを盛り込み、古典の扱いでも、名文の暗唱など、子どもたちに言葉の宝として引き継いでやりたい。</li> </ul>
<p>子どもたちに身につけさせたい能力の育成（自ら学び自ら考える「力」の育成）</p>	<p>①次代を担う子どもたちに身に付けさせたい「力」の具体的な内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教育課程実施状況調査において、国語は大切だがあまり好きではない、記述式問題の無解答率が高いということが明らかになった。その現状に対して十分な対策がなされていない。</li> <li>○ 自分の気持ちや考えを適切に相手に伝え、生活上の問題を言葉で解決する力の育成が求められる。</li> <li>○ 情報メディアが発達している中、どのように国語の能力を育てていくかが大切である。パソコン活用能力の育成や、研究と調査といった「自己学習の力」の育成など、21世紀を担う子どもたちを育てるための新しい観点が必要である。</li> </ul> <p>②思考力・表現力等の「力」を育成するための指導方法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 国際調査（PISA）において、読解力が低下。また、論述形式に課題</li> <li>○ 教育課程実施状況調査において、記述式の設問の通過率が低下。（相手や目的に応じて、自分の考えを明確にして書く、根拠を明確にしながら自分の考え方を述べる力が不十分）</li> <li>○ 問題文に正対して答えることができない、状況を解釈して自分なりの言葉で考えを組み立てることができないという状況がある。それは子どもたちが目的や方法について、その決断の場に自分が主体的に関わっていない部分があるのではないか。</li> <li>○ 国際調査（PISA2000）において、趣味として読書をする生徒が、諸外国に比べて少ない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 思考力や想像力を育成すること、言語感覚を養うことが国語科のねらいとして非常に大切。</li> <li>○ 批判的に情報（文章）を吟味する力が必要であり、こうした力は創造性、個性の土台であり、ディベート等の討論の力を育成する上でも重要である。</li> <li>○ 教科の枠を超えた指導が有効（例：社会科や理科の授業で作ったレポートを国語の時間に国語科の狙いに即して書き直させる）。</li> <li>○ テレビやIT化というメディア時代において、子どもたちの読書離れが国語力の低下に影響しており、国語だけでなく、各教科において、読書を通じて教育内容の理解を深めることが重要。</li> <li>○ 覚える力だけではなく、IT等を活用し、情報を読み取り、文章を探し当て、その情報を比較して、事実がどうか確かめる力が必要。</li> <li>○ 子どもたちに国語への「関心・意欲・態度」をはぐくむことを重視することが必要。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 国語力を考える上で、（1）漢字や文法、語彙ということばそのもの、（2）それを使って論理的に話をまとめたりするなど運用する力、（3）言語生活場面を学校生活での言葉の教育に持ち込む「言語生活力」の三つの視点から考えることもできる。</li> <li>○ メディア・リテラシーという観点から、英国やカナダなどで、批判的に情報に接していく研究があり、参考になるのではないか。</li> <li>○ PISA（読解力）で求められた論証力、論述力を明確にする必要がある。</li> <li>○ 児童生徒が、表現者として、筆者の書きぶりを吟味する。こういう読み方を工夫することが必要。</li> <li>○ 考えや意見に対する評価、吟味とともに構成を含めて、文章の書きぶりのよさや表現の特色などといったことを評価することができるということも必要。</li> <li>○ 美しい日本語、奥深い文化に触れさせ、日本の伝統などについて考えさせることが大切。</li> <li>○ 読書活動は、幼児期の読書体験が大きく影響する。家庭での言語環境が大切である。</li> <li>○ 読むことの目的、読みたいという気持ちを持たせることが重要。</li> <li>○ 文学的な作品では優れたものがあるが、論理的な作品でも定番でこれだけは読むことが必要というものを提示することが必要。</li> <li>○ 朝の読書が普及した原因として、教員も一緒に読む、感想文を求めない、何を読んでも良い、の三つが大きい。一方で、読ませたい価値があるものをどうやって読ませるかなどの課題もある。</li> <li>○ 国語力は国語科だけの問題でなく、初等中等教育で行う全教科にわたる非常に重要なポイントであるが、そのためには学校図書館、司書教諭の充実が必要。</li> <li>○ 短い文章ではなく、本を一冊まるごと読むということを積極的にやることを指導事項に入れていってはどうか。</li> </ul>

主な論点の柱	現状と課題	教育課程部会、専門部会での主な意見
<p>すべての子どもたちに身につけさせたい知識・技能等の徹底（「基礎・基本」の徹底）</p> <p>① 「基礎・基本」の具体的な内容</p> <p>② 「基礎・基本」を徹底するための指導方法、補充的な指導の必要な児童生徒への教育の在り方</p>	<p>○ 教育課程実施状況調査（ペーパーテスト調査）において、歴史の大きな流れや基本的な歴史的事象の理解、政治や経済の基本的概念の理解、世界的視野から見た日本の自然環境の理解などに課題がみられる。また、統計資料の読み取り・活用に課題がみられる。</p> <p>○ 教育課程実施状況調査（教師質問紙調査）（「行っている」+「どちらかといえば行っている」の計）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「児童生徒の多様な考えやつづきを生かした授業を行っていますか」 小学校 約 5 割、中学校 約 5 割</li> <li>・「観察や調査・見学、体験を取り入れた授業を行っていますか」 小学校 約 5 割、中学校 約 2 割</li> <li>・「どこをどのように勉強すればよく分かるようになるか、日ごろから個々の児童生徒にアドバイスや説明をしていますか」 小学校 約 6 割、中学校 約 7 割</li> <li>・「理解が不十分な児童生徒に対し授業の合間や放課後などに更に指導していますか」 小学校 約 2 割、中学校 約 3 割</li> </ul>	<p>○ 学習内容としてしっかりと身につけるべきものは、方針として、はっきり示すべき（県庁所在地、世界の国名など）。</p> <p>○ 社会科で海外の国について調べるのは小学校6年生の3学期であり、都道府県の学習についても、都道府県名を覚えることはあっても、例えば九州と北海道の風土の違いを学習する時間は少ない。これでは、調べ学習を行おうとしても、基本的な知識がないという状況である。</p> <p>○ 国際社会で対等に伍していくためには、自分の国を愛し、自分の国の歴史あるいは文化を自分の言葉で語れなければならない。現場で近・現代史が十分指導されているか、しっかりと議論することが必要。</p> <p>○ 学習の手がかりとなる基本的な概念については、中味を明確にし、生徒に実感させることが必要（人格の尊重、コストなど）。</p> <p>○ なるべく早い段階から、子どもにとって身近な、お金を通して、社会の仕組みを理解させ、勤労観・職業観を身に付けさせることが重要。</p> <p>○ 社会の構成員としての責任と義務、政治そのものの重要性をよく理解させることが重要。</p> <p>○ 民主主義、自由と平等など哲学的、倫理的な内容について、言葉だけでなくそれが何かを問わせることが重要。</p> <p>○ 学校における問題行動や犯罪の低年齢化などの問題を考えると、小学校3、4年生から、社会の成り立ち、個人が社会において果たす役割やルールなど、社会的な規範性を身に付けさせるようにすべき。</p> <p>○ 学習内容の現状が、アカデミックな観点为中心で、市民生活面からのニーズに十分合致していない。</p> <p>○ 市民生活に必要な力を明確にした上で、それを前提として学年や教科に内容を配当するという方法も考えるべき。</p> <p>○ 国際化、IT化、知的財産権、環境の問題、企業の社会的責任などが日本の社会全体として遅れている。世界的な事象がある程度理解できる素養を身に付けることが必要。</p> <p>○ 日本人あるいは、社会人としてしっかりとした素養を身に付ける必要がある。そのためには、日本の伝統や文化、歴史の教育が重要。</p> <p>○ 働く人たちに目を向けさせ、それぞれ工夫していることや、それらの仕事が自分たちの日常生活を支えているものであることに気付かせることが必要。</p> <p>○ 資本主義経済社会の中で生きていく上で、金融経済について体験学習を通じて学ぶことは重要。</p> <p>○ 物事を損得で判断するのではなく、公正に判断できるような力を法教育で育てることが必要。</p> <p>○ 知識を、断片的な知識、教養知、科学知の3種類に分けて考えるべき。これらをどう整理し示していくかを考えることが必要。</p> <p>○ 社会について、知るという要素、分かるという要素、判断し生かしていくという要素、それぞれに基礎・基本と発展があり、また、それぞれに応じた指導方法があると考えられる。</p> <p>○ 断片的な知識のトレーニングも必要だが、断片的な知識のみを身に付けて体験をしても偏った子どもになるので、指導内容を構造化して示していくべき。</p> <p>○ 基礎的・基本的な内容は確実に身に付けさせられる内容まで精選することが必要。</p> <p>○ 学校で教えるべき知識が際限なく広がっていくようなことがないようにすべき。</p> <p>○ 基本的事項は、繰り返し学習が重要。</p> <p>○ 学習指導要領は内容中心で教える際の要領が不十分。外部人材の活用方法、地域学習の生かし方など、良い事例は提供できる。</p> <p>○ 子どもたちのベースとなる体験や感覚が非常に異なっており、小学校高学年での地理的内容、歴史的内容の指導が難しくなっている。総合的な学習の時間との関連を通じた体験が重要である。</p> <p>○ 講義で教えただけでは学校を卒業するとほとんど忘れてしまうが、体験を通して学んだことは鮮明に覚えているものなので、授業の中で体験をさせていくことが重要。</p> <p>○ 子どもたちに教養知が魅力あるものだと思わせる戦略が必要。</p>

子どもたちに身につけさせたい能力の育成（自ら学び自ら考える「力」の育成）

①次代を担う子どもたちに身に付けさせたい「力」の具体的な内容

○ 教育課程実施状況調査（ペーパーテスト調査）において、自分の考えを表現することなどに課題がみられる。

- 地域社会形成の担い手として意識化させることが必要。
- 育てたい力は、社会の形成者としての資質であり、合理的に判断する力、公正に判断する力を育てる必要がある。様々な歴史を経てようやく手に入れた民主主義体制が貴重なものであることに気づかせるとともに、民主主義社会、市場経済社会を支える「法」というものがどういうものか教える必要がある。
- 国際社会に生きる日本人としての自覚、日本人としてのアイデンティティを育てる必要がある。
- 社会科において多様性への視点を重視すべき。例えば、世界各地で同じ10歳の子どもがどういう生活をしているかを学ぶことで多様性が生まれる。
- 国際化の中で、しっかりとした宗教観を育てることが必要。
- 事実と知識を学んで、それを発表するだけでは不十分。社会の一員として、どう主体的に対応していくかが重要。
- 答えが一つではないことを教え、社会に出たときに様々な選択肢に対応できる力を育てることが必要。
- 問題意識が十分育ってない。地・歴・公民の総合力が不十分
- 他者と共存するため対話する力、コミュニケーション能力が重要。
- 新しいものを創り出し、よりよい社会にしていくために課題解決をしていくことができるよう、アントレプレナーシップ（起業家精神）の育成が必要。
- 発達段階に応じた空間的、時間的なものの見方や考え方、人と人とのかかわりについて身に付けさせることが重要。

②思考力・表現力等の「力」を育成するための指導方法

○教育課程実施状況調査（教師質問紙調査）（「行っている」+「どちらかといえば行っている」の計）

- ・「課題解決的な学習を取り入れた授業を行っていますか」  
小学校 約7割、中学校 約5割
- ・「調べたことを発表させる活動を取り入れた授業を行っていますか」  
小学校 約8割、中学校 約4割

- 学んだり考えたりすることは、大人と接する中で身に付くもの。実社会で仕事をしている人や地域の人々の活用が有意義。
- 子どもが問題を考えるときの思考の流れに着目して指導や評価をすべきと考えるが、学校に行くとなっていないと感じる。例えば、発言するとき必ず理由付けをするといった指導が必要。どのように物事を考えるのかという指導をしてほしい。
- 学習や体験学習の後のフォローが不十分。考えさせる授業の例の周知が重要。学ぶ意欲が育っている授業について研究する必要。
- 関心・意欲・態度の育成が重要。子どもたちが学んだ知識を生かして自分で地域のことなどをデザインするような学習をさせることにより、自信を持たせることがやる気につながる。
- 課題解決を行う学習をもっと授業に取り入れていくことが必要。
- 学校の定期テストでも、知識のみを問うのではなく、思考力・表現力を問うような問題を出すことが必要であり、教員の作問技術を上げることが重要。

主な論点の柱	現状と課題	教育課程部会、専門部会での主な意見
<p>すべての子どもたちに身につけさせたい知識・技能等の徹底  <b>〔基礎・基本〕の徹底</b></p> <p>① 「基礎・基本」の具体的な内容</p> <p>② 「基礎・基本」を徹底するための指導方法、補充的な指導の必要な児童生徒への教育の在り方</p>	<p>○ 教育課程実施状況調査において、計算技能など基礎的・基本的な内容の通過率は前回との比較で上昇（中学校の数学は、前々回との比較では低下）。</p> <p>○ 小学校の小数・分数の除法の計算や円の面積、中学校の角柱・円錐の表面積や体積などに課題。</p> <p>○ 小学校では作業的・体験的な活動を取り入れた授業を行っている教師が多い。</p> <p>○ 中学校では選択教科「数学」として補充的な学習・発展的な学習の両方を行う時間を設けている学校が多い。</p> <p>○ 習熟度別指導を導入する学校が増えている状況。</p>	<p>○ 系統的なカリキュラム編成は重要だが、その際、子どもの発達を踏まえた適時性を考慮する必要。</p> <p>○ 数量や図形に対する感覚、アルゴリズムのスキルの育成が大事ではないか。</p> <p>○ 小学校と中学校で繰り返し学習することや小学校で準備して中学校でしっかり指導するというスパイラル方式が適当な場合もある（計算や文字の使用、図形など）。</p> <p>○ 相似と地図の縮尺、反比例としてこの原理、グラフ関係など、数学的概念と他教科の学習内容との関係を十分踏まえて、各段階の内容を検討する必要がある。</p> <p>○ 例えば、四則計算や式の変形を正しく行えるとといった基礎的能力などを身に付けさせるべき。</p> <p>○ 例えば、分数の計算はできるが、立式は十分にできないなどの現状がある。立式をする際に必要な意味理解を重視することが大切。</p> <p>○ 例えば、面積を求める場合、公式の機械的な適用になりがちであるが、面積を求める過程や意味を理解することが重要であるので、基礎基本の適用範囲を広げてとらえるべきではないか。</p> <p>○ 帯分数の計算がなくなったため、公約数や公倍数、方程式の基礎が弱くなっている。子供のつまづきと育てるべき力や系統性との関係を考えるべき。</p> <p>○ 小数、分数など難しい概念は早くから学習させ、何度も繰り返すことで、分かるようになるのではないか。</p> <p>○ 比例と反比例は小学校で教えるなど、ある概念を理解しようとするとき似て非なる別な概念を示してはじめて分かることもある。</p> <p>○ 例えば、小学校では合同や対称、正多角形を扱うとともに、図形と図形を関係付けて見るなど図形に対する感覚を豊かにすべき。</p> <p>○ 日常生活で確率・統計はよく使うので、充実する必要がある。</p> <p>○ 例えば、不等式は「数学Ⅰ」で学習するが、中学校段階で具体的体験的に学習することが望ましい。</p> <p>○ 内容として難しいものであっても、感覚的に知っておくことが必要な場合もある（円の面積、球の体積・表面積など）。</p> <p>○ 速さと時間の関係、物体の落下などを考慮すると二次方程式や二次関数までが日常生活で必要ではないか。</p> <p>○ 学習指導要領の基準性を明確にし、教育内容を基礎的・基本的なものに厳選し、補充的な学習を工夫するなどしてその定着を図るといふ現行の考え方は今後も維持すべき。</p> <p>○ 子どもにとって基礎基本として働くということは、知識・技能が使えるという視点が必要である。</p> <p>○ 例えば、三角形の面積を理解し、台形に広げるといふ学習指導要領の考え方は良いが、具体的な指導方法を示すことが重要</p> <p>○ 計算の技能を指導するときに、計算の意味理解をどう指導するか工夫が必要。</p> <p>○ いわゆる鶴亀算などを子どもに理解させることがあるが、方程式を使って理解できるという考えもある。</p> <p>○ グラフを使って事象を説明するときに、表をつくり、計算が必要となるため、データを活用する活動の中に基礎・基本を盛り込むべき。</p> <p>○ 学習する側の目線に立って、実生活で直面する現象を例にして公式のもつ意味を説明していくことが大切。</p> <p>○ 基礎的・基本的な内容を身に付けるためには、発展的な内容も取り入れながら考え方を広げていくということも必要であり、このことにより、基礎・基本の確実な定着につながるのではないか。</p> <p>○ 例えば、数学の専門家を育てるための教育の階段を上り切れない子どもに、どのような手当てするか。そのことをよく考えておかないといけない</p>

		<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 企業研修では、記憶の理論を使って、暗記、穴埋め、事例研修など多種多様な教え方をしている。</li> </ul>
<p>子どもたちに身につけさせたい能力の育成（自ら学び自ら考える「力」の育成）</p>	<p>①次代を担う子どもたちに身に付けさせたい「力」の具体的な内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 国際調査（PISA、TIMSS）において、言葉や式・グラフ等を用いて自分の考えを数学的に表現する設問に課題。</li> <li>○ 教育課程実施状況調査において、計算はできるが、意味が理解できていない傾向がある。</li> <li>○ 国際調査（TIMSS）において、算数・数学が楽しいと思う子どもの割合が少ない。</li> </ul> <p>②思考力・表現力等の「力」を育成するための指導方法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 現行学習指導要領では、観察・実験、課題学習など体験的・問題解決的な学習の充実を図っている。</li> <li>○ 中学校では選択教科「数学」として補充的な学習・発展的な学習の両方を行う時間を設けている学校が多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 算数・数学教育においては、その内容の理解や思考力の育成、文化の享受・継承など、今後も引き続き大切にしていくべき面がある。また、同時に、表現力やコミュニケーション能力、問題解決能力など時代や社会背景に応じて強調すべき面がある。</li> <li>○ 算数・数学教育で共通に求めたい資質として、例えば、計算力や統計的な見方などのように日常生活に結びついた数学的リテラシー、物事を論理的に考え、合理的に表現する力、探究心や豊かな創造性などが考えられる。</li> <li>○ 小学校では具体的な活動、中学校では帰納から演繹へ、高校は論証を重視すべき。</li> <li>○ 資料に基づいて判断する、根拠に基づいて説明することが重要。</li> <li>○ 算数・数学では、多面的にもものを見る力や論理的に考える力など、創造性の基礎を育てることを引き続き大切にしていく必要がある。</li> <li>○ 中学校で学習していた統計的な内容や標本調査は高校へ移行されたが、数学の内容の中では社会生活とのかかわりが深い。社会人として身に付けておくことが求められる内容についての検討が必要。</li> <li>○ 数の感覚、量の感覚、図形の感覚といった感覚や感性を育成する必要がある。</li> <li>○ 算数・数学はできる、できないが明確になることから、楽しいと思う子どもが少ないと考える。自分でできなくとも、面白い、素晴らしいなど鑑賞する力も育成すべきではないか。</li> <li>○ 数値を検証したり活用したりするため、サンプル数や有意差に着目したり、棒グラフや折れ線グラフの違いに気付きながら電卓やコンピュータを活用するなど実社会向け、日常生活向けの数学を扱ってはどうか。</li> <li>○ 数学はものごとを論理的に表す普遍的な言語としての性格をもつ。計算などの基礎だけにとどまらず、証明などきちんと論理立てて説明できる力を育てることが必要。</li> <li>○ 概数でとらえる力、大体このくらいになるという感覚を身に付けさせることが重要。</li> <li>○ 自分がどのように考えを進めてきたかを数式、言語、図などで表現する力の育成を重視すべきではないか。</li> <li>○ 確かめる、吟味するといったプロセスを振り返る力や判断する力を重視すべき。</li> <li>○ 日常的な概念の形成、多様な表現、柔軟な幅広い解釈、論理的な思考など、算数・数学教育に関連する国語力の育成が不可欠。</li> <li>○ 例えば、<math>2 \times 3</math>が<math>2 + 2 + 2</math>であることを式に表すといった力が必要ではないか。</li> <li>○ 図や表に表す力、統計的なものを解釈する力などが必要ではないか。</li> <li>○ 知識や技能をなぜ身に付ける必要があるのか。先人の遺産の継承、思考の節約など、意義の理解が必要。</li> <li>○ 数学は世の中の道具として存在するだけでなく、数や図形の美しさや論理を追求していくことも大切。</li> </ul> <p>○ 理数教育は、人が考える力を養うのに大切であり、教師は子どもが疑問を持ったことにしっかりと答えられるような力をつける必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 算数的活動・数学的活動については、具体的な活動内容について例示したり、既存の領域を組み合わせ、活動や工夫をすること自体を主眼とする領域を設けてはどうか。</li> <li>○ 計算だけではなく、数学的な考え方も学習指導要領で例示するなどして、数学的な考え方を育成する指導を充実すべき。</li> <li>○ 数学の知識を持つことは大事であるが、それをいつ、どのように使えばいいかが分かれば、もっと数学のおもしろさを味わい、自分の学んだ知識を効果的に生かすことができる。</li> <li>○ 考えをまとめて整理したり、問い直したりするなど、自分でじっくり考える過程を大切にすべき。</li> <li>○ 子どものいろいろな考え方を取り上げ、話し合いの活動や比較検討する場面を取り入れる工夫が必要。</li> <li>○ 例えば、分数の計算を行う場合に、整数に数値を変えて考え</li> </ul>

てみるなど問題の数値を変える、設定し直す、問題そのものを作り出すといった場面が必要ではないか。

- 数学的な考え方を育てるに際し、例えば、子どもたちが自分で問題を作り、問題の条件をかえてみたらどうかなど、発展的に考え、数学を作り上げていく工夫が考えられる。
- 高等学校段階では、セミナー形式を取り入れ、例えば生徒に授業で学んだことなどについて話しをさせることでより学習が深まることも考えられる。

主な論点の柱	現状と課題	教育課程部会、専門部会での主な意見
<p>すべての子どもたちに身につけさせたい知識・技能の徹底(「基礎・基本」の徹底)</p> <p>① 「基礎・基本」の具体的な内容</p> <p>② 「基礎・基本」を徹底するための指導方法、補充的な指導の必要な児童生徒への教育の在り方</p>	<p>○ 教育課程実施状況調査において、基礎的・基本的な内容の通過率は前回との比較で上昇。一方で、てこの釣り合いや質量保存の概念など基本的概念を問う問題で通過率(正答率)が低いものが見られる。</p> <p>○ 国際調査(TIMSS)の結果において、未習事項にも正答率の高いものも見られたが、既習事項に比べると低い。</p> <p>○ 教育課程実施状況調査において、観察・実験を積極的に行っている教師の割合が高い。</p> <p>○ 中学校の選択教科「理科」では、補充的な学習・発展的な学習の両方を行う時間を設けている学校が多い。</p>	<p>○ 生徒が自分で計画を立て、身体を使って観察、栽培、実験などを体験することが重要。</p> <p>○ 小学校では定性的に扱い、中学校では定量的に扱うなど、発達段階、学校段階によって扱いが変わるという発想で内容を考える必要がある。</p> <p>○ 繰り返し学習が重要。中学校でいくらかでも学習している事項は高等学校で定着しやすい。</p> <p>○ 小・中学校段階は経験で確認できる法則と粒子性の考え方を中心においてはどうか。</p> <p>○ 小学校の理科においては、熱や温まり方など、生活に密着した素材を重視していく必要がある。</p> <p>○ 天文の単元は、小学校4年で学習してから中学校3年まで学習しないので、増やしてはどうか。</p> <p>○ 物の三態(固体、液体、気体)の勉強はきちんとすべきではないか。</p> <p>○ 質量保存の概念の定着を図るためには、物質が粒子でできているということを中学校1年や小学校高学年でも取り上げてはどうか。</p> <p>○ 物理では仕事概念、化学ではイオンの視点、生物では進化と遺伝と発生が中学校段階で必要。</p> <p>○ 浮力や水圧についてはアルキメデスの原理とかパスカルの原理など指導すべきではないか。</p> <p>○ 酸性の溶液やアルカリ性の溶液を混ぜるとどうなるかというような定性的なものは、イオンで取り扱った方が子どもたちの理解が進む。</p> <p>○ 中学校で化学反応を学習してから、光合成を学習すると、その逆の場合に比べて定着度が違うので、学習の順序性にも配慮すべき。</p> <p>○ 花の咲く植物と花の咲かない植物の両方を学習することで、より理解が深まる。</p> <p>○ 生活に結びつけた理科という観点から、自然災害への対応力という視点を取り入れたらどうか。</p> <p>○ 「地球と宇宙」の領域など、地域の特色を生かした取組が可能な内容や生活と密着した内容については、柔軟なカリキュラムが編成できるよう、幅のある規定ができないか。</p> <p>○ 理科では、興味・関心を高めるため、実際に観察・実験を行ったり、見てみたりすることが重要。</p> <p>○ 子どもたちが具体的に操作をしたり、体験をしたりすることを重視する指導が大切。</p> <p>○ 学校においては、子どもたちになるべく早く結論を求める指導に陥りがちであるが、小学校から中学校にかけては、じっくり観察・実験に取り組みせ、じっくり考える楽しさを大切にすべきではないか。</p> <p>○ 基礎・基本の確実な定着を考えた場合、厳選すればするほど、十分な時間をかけて基礎・基本を教えることが必要。</p> <p>○ 生徒の興味・関心にも意識が向きすぎて、基礎・基本となる重要なことは嫌でも教え、たたき込むという姿勢が現在の教育に欠けているのではないか。</p> <p>○ 暗記させるのではなく、一つ一つの内容を子どもなりに理解できる論理性をもって教えることが重要。</p> <p>○ 子どもたちの体験不足など子どもたち自身が変化していることを念頭に置く必要。</p> <p>○ 発展的に捉えたりするなど見方を変えることで概念が定着することから、重要な科学的な概念について、スパイラルの指導が大切。</p> <p>○ 基礎基本を徹底させるためには、生活に結びつけられる指導、生活と密着した内容、小・中学校の内容の系統性といったことを考える必要がある。</p> <p>○ 地学分野は教室に入りきらない素材を対象としているので、今後とも野外観察を重視することが大切。</p> <p>○ 観察・実験を充実して行うためにも、十分な時間を確保したり、少人数で取り組めるような環境を整えたり、例えばティーム・ティーチングのような複数で指導できるような体制を整備したりすることが重要ではないか。</p> <p>○ 学校における備品等の購入予算は厳しい現状にあり、理科教育振興法による予算補助を増額するなど、学校で十分な教育ができる環境を整備するための予算の増加が必要。</p> <p>○ 大学時代に理科を専攻していない小学校教員に対しても、理</p>

		<p>科の趣旨や内容をきちんと伝えることができるような工夫が必要。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 生活の中の科学的な事象に目を向けさせ、家庭でも科学を楽しみながら学べるカリキュラム開発を行うべき。</li> </ul>
<p>子どもたちに身につけさせたい能力の育成（自ら学び自ら考える「力」の育成）</p>	<p>①次代を担う子どもたちに身に付けさせたい「力」の具体的な内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 国際調査（PISA）において、科学的リテラシーの成績は高い。ただ、科学的な解釈を要する設問、論述形式の設問に一部課題がある。</li> <li>○ 教育課程実施状況調査において、日の入りの太陽の動きに関する問題など、空間的な認識やそれに基づく思考面に課題がある。</li> <li>○ 教育課程実施状況調査において、意味付けや関係付けについて説明を必要とする数問については、通過率が低い。</li> </ul> <p>②思考力・表現力等の「力」を育成するための指導方法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 現行学習指導要領では、観察・実験、課題学習など体験的・問題解決的な学習の充実を図っている。</li> <li>○ 教育課程実施状況調査では、自分の考えで、予想して観察・実験を行う生徒が増加している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 理科教育で重視すべき点は、①観察や実験等を通じて興味・関心を持たせること、②興味・関心を持たせた上で、知的好奇心を高めること、③知的好奇心を高めるとともに、理論付けを行う論理的思考力を育成すること、の三点である。</li> <li>○ 科学的な根拠や事実をもとにしながら考える、筋道立てて論理的に考えるといった科学的な見方や考え方ができる力をつける必要がある。</li> <li>○ 考える力を育成するためには、まずは体験することが重要であり、また体験したことを表現することが重要。</li> <li>○ 現象の観察や理解を科学的に論述するなど、科学的に考えたりする力、科学的論述能力を高めるといったような点も必要ではないか。</li> <li>○ 問題を見だし、予想を立て、それに基づいて条件を制御しながら実験をして、結論を得るといった問題解決能力を小・中学校一貫させた形で身に付ける必要がある。</li> <li>○ 自然体験や科学体験を通じて、自然愛護の心を育成することや論理をつくる楽しさを味わわせるような思考力の育成が重要ではないか。</li> <li>○ 学んでないこと、見たことのないものでも想像できるような力が大切。</li> <li>○ これからの子どもたちに必要なことは、能力を基盤にして、内容をうまく組織し、習っていないいろいろな問題でもある程度解ける、考えられるようにすることではないか。</li> <li>○ 定量的に扱うことが減ってしまったために、思考力とか論理性を育成しにくくしてはいないか。</li> <li>○ 小学校段階においては、自然事象に直接触れる体験を通じて、自分の言葉で語り、論述する体験を積むような学習が必要。中学校段階においては、体験から例を引いて、比較し類推することが必要。</li> <li>○ 電圧と電流、融点、沸点、酸化、還元、物体の運動など、科学の学習にとってグラフ処理は大切な思考法。</li> <li>○ 実際の社会でどのように役に立っているのかということや、なぜそうなるのかという論理や考え方などが重要。</li> <li>○ 生涯にわたって知的なものに関心を持ち学び続ける力を身に付けさせることが大切。</li> <li>○ 地球や太陽系のことを深く知ることや、自然災害への対応力や動植物を思う心情を養うことは、社会人として必須の項目ではないか。</li> <li>○ 子どもたちに論理的思考力を身に付けるためには国語力も必要であり、比べたり、抽出したり、関連付けたりすることの力を付けることは、理科でも、国語でも、算数でも必要となる。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 現象を科学的に考え、論述する力を高める指導の充実が必要。</li> <li>○ 科学的な視点に基づいてデータを検討し、考察し、科学的に表現するための時間を増やす必要。</li> <li>○ 科学的な読み物を読んだり、環境への視点を持つことにより、論じる力が育成されるのではないか。</li> <li>○ 日常の学習が問題解決の役に立ったという経験を通じて、理科が役に立つ、大切だと分かることが重要。</li> <li>○ 子どもたち同士の事象に対する価値付けや感性が違っていることを楽しみ、意見し合うことの面白さを感じさせる理科教育が必要。</li> <li>○ 子どもの自発的な意見を引き出すことは大事であるが、正しい科学的知識を持った専門家が、客観的に正しいとされている内容をきちんと定着させ、これに基づいて、子どもが次の考察をできるようにすべきではないか。</li> <li>○ 観察・実験を行うことが難しい場合、コンピュータなどを有効に活用したシミュレーションやモデリングを行うことも大切。</li> <li>○ グラフ指導等、観察、実験の技能の指導については、単なるスキルとして行うのではなく、探究の過程や全体の流れの中で位置付けないと習得率が悪い。</li> <li>○ 座学と実験、ITなども活用して論理的に思考したり、考えたりするプロセスのトレーニングを行う必要があるのではないか。</li> <li>○ 小学校に環境や科学の視点を入れることで、興味関心を持続させることができるのではないか。</li> <li>○ 高等学校においては、従来の板書スタイルの授業から、討論や議論をさせるような生徒の変化に対応した新しい指導法が必要ではないか。</li> </ul>

主な論点の柱	現状と課題	教育課程部会、専門部会での主な意見
<p>すべての子どもたちに身につけさせたい知識・技能等の徹底                      (「基礎・基本」の徹底)</p> <p>① 「基礎・基本」の具体的な内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 現行学習指導要領では、音声によるコミュニケーションを重視し、3年間を通して「聞くこと」「話すこと」の言語活動に重点を置いている。</li> <li>○ 現行学習指導要領では、言語活動を行うにあたって、言語の使用場面の例として、あいさつ、電話での応答等を挙げるとともに、言語の働きの例として、説明する、質問する等を挙げている。</li> <li>○ 現行学習指導要領では、言語材料を基本的なものに精選し、日常生活にかかわる基本的な語を含めて、指導する語の総数を1000語程度から900語程度とし、動詞、名詞、形容詞などは適切に選択することとし、文を構成する上で必要な100語を指定した。</li> <li>○ 教育課程実施状況調査では、英語を理解するための基本的な構文などが一部定着していない。また、「書くこと」に関する文構造問題の分析では、語彙などの指導を十分行う必要があることが指摘されている。</li> <li>○ 教育課程実施状況調査において、「聞くこと」では肯定的に決まった応答表現が、「読むこと」では、文の意味内容が直接的に絵に結びつく問題について、概ね定着している。また、「書くこと」については、be動詞と一般動詞の併用や、代名詞の変化などについて、一部定着していない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 今後は発信力を重視すべきであり、そのためには、レベルに応じた語彙力、文法力、発音、書く力が必要である。</li> <li>○ 日本人が英語を「話さない」のは、スキルがないため「話せない」という面もある。</li> <li>○ 相手の言ったことに対して応答するという形でのリスニング学習が中学校では多いと思うが、その際パターン化した対話練習になっており、適切な応答力は育成できていない。</li> </ul> <p>(語彙)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 言語の習得は基本的に単語量によるので、反復練習を通じて語彙数を増やすことが重要である。</li> <li>○ 話すためには、単語やセンテンスの蓄積が必要である。</li> <li>○ 教科書の語彙数が少ない。学校の教科書がいろいろなトピックがあって、毎回トピックが変わるので、定着しにくい。</li> <li>○ 中学校において学習すべき語を、過去に行った語彙提示に倣い、1200～1500語程度を提示する方向に戻したほうが良い。</li> <li>○ 語彙数に関して、何語までという指定はやめるべきである。</li> </ul> <p>(発音、文法等)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 辞書を引くことや発音記号をきちんと教えることが重要である。</li> <li>○ 簡単な表現でも基本的な英語音のスキルがなければ日本語英語にしかならない。今後は発音や文法などスキルの訓練をもっと重視すべきである。</li> <li>○ 「文法事項」の学習は重要であるが、「言語活動」の学習をより重視すべきである。</li> </ul>
<p>② 「基礎・基本」を徹底するための指導方法、補足的な指導の必要な児童生徒への教育の在り方</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教育課程実施状況調査において、成績上位層と下位層への分布がやや広範にわたっている。</li> <li>○ 教育課程実施状況調査において、授業が「分からないことが多い」「ほとんど分からない」と回答する生徒の割合が、他教科より高い傾向にあり、学年があがるにつれて上昇傾向にある。(中1：20.5%、中2：26.2%、中3 28.3%)</li> <li>○ 中学校では選択教科として補足的な学習を行う時間を設けている学校が多い。</li> <li>○ 少人数または習熟度別指導を導入する学校が多い。(中1：35.0%、中2：39.6%、中3 40.6%)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 語彙も文法も単線型の指導が多いので、スパイラルに繰り返し指導することが必要である。</li> <li>○ 世界に通じる authentic な英語を教えるためには、教員自身が、英語と日本語の子音が生理学的にどのような音に作られているか、物理学的にどのような音になっているかを理解し、体得し、生徒に確実に教え込むことが必要である。</li> <li>○ 反復練習の不足により、語彙、文構造の理解の定着が不十分になっている。</li> <li>○ 一定のタスクのため、関連した文章を繰り返し読み、自分の意見を形成する場面を作るという指導法が求められるのではないかと。</li> <li>○ 本当にきちんとした発音でなくても、例えば国際会議などの場で英語によるコミュニケーションは可能であり、必ずしもきちんとした発音の英語であることが求められているわけではない。</li> </ul>

<p>子どもたちに身につけさせたい能力の育成（自ら学び自ら考える「力」の育成）</p>		
<p>①次代を担う子どもたちに身に付けさせたい「力」の具体的な内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教育課程実施状況調査において、英語を聞いて詳細を理解することや概要や要点を理解することはある程度できるが、相手の話しかけに込められた意図を捉えて、適切に応答する力は十分身につけていない。</li> <li>○ 教育課程実施状況調査において、いくつかの情報を整理し、全体の流れの中で、それがどういう意味を持つかが適切に読み取れない傾向が見られる。</li> <li>○ 内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力が十分身につけていない。</li> <li>○ 教育課程実施状況調査において、英語が大切だ、ふだんの生活や社会に出て役立つと考えている生徒は、他の教科に比べて多い。好きだという割合は他の教科とさほど変わらない。学年が上がるにつれて低下傾向（好き・どちらかといえば好き／中1：60.5%、中2：51.0%、中3：48.7%）。</li> <li>○ 現行の高等学校の学習指導要領において、言語の使用場面の例として、電子メール、スピーチ、ディスカッションなどが、言語の働きの例として、歓迎する、報告する、賛成する、反対するなどが挙げられている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 音声によるコミュニケーション能力は、読むこと、書くことと一体のものであり、これらの能力を総合的に身につけていくことが必要である。</li> <li>○ 英語力を考える場合には、「聞く力」「話す力」といった技術の習得だけではなく、英語学習に取り組もうとする「意欲」「学習レディネス」にも十分配慮すべきである。</li> <li>○ 英語で活躍できる人は、母語でも活躍できる。何が良いコミュニケーションなのかを身につけ、それを場面に応じて切り替えることができる能力が大切である。</li> <li>○ 日本人が世界で発言しないのは、言語能力の問題だけではなく、文化的背景による部分がある。言語的なスキルを身に付けバイカルチュアルになる必要がある。</li> <li>○ 現在の英語教育は、言語能力のうち、状況に即してきちんとコミュニケーションができる社会文化能力や社会言語能力に重点が置かれているが、自分の持っている限られた知識を使いこなす能力の観点で不足している。</li> <li>○ 小学校から大学までのどのレベルでどのような英語教育が必要かを総合的に検討する観点と、他教科を含む全体としてコミュニケーション能力をどのように育成するかについて検討する観点が重要である。</li> <li>○ 中学校3年間の英語を十分に使いこなせていないことが重要な課題となっているなかで、高校の部分を中学に下ろして内容を増やしていくべきではない。</li> <li>○ コミュニケーションばかり重要視されると、簡単な英会話に置き換えられてしまう。コミュニケーションは内容であることが強調されるべきである。</li> <li>○ 言いつ放し、聞きつ放しでなく、交渉することや、相手の情報量にあわせて自分の発信するものを調整することが重要であり、国際理解につながるキーとなる。</li> <li>○ 小学校から英語教育を行うことで、全体として時間を増加しゆとりのある教育を行うことができ、思考力や表現力の育成といった課題に対応していけるのではないかと。</li> </ul>
<p>②思考力・表現力等の「力」を育成するための指導方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 現行学習指導要領は、実践的コミュニケーション能力を育成することを目標としており、教材について、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮したものを取り上げることを求めている。</li> <li>○ 現行学習指導要領では、ネイティブスピーカーの協力を得たり、ペアワーク、グループワークを適宜取り入れたりするなど、指導形態や学習形態の工夫に配慮するよう求めている。</li> <li>○ 少人数または習熟度別指導を導入する学校が多い。（中1：35.0%、中2：39.6%、中3 40.6%）</li> <li>○ 中学校におけるALTの活用時間数は、英語の総授業時数の2割程度である。また、半分以上英語を用いて英語の授業を行っている学校は、3割程度</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 小学校では、感性教育を十分に生かした音声教育を軸にした英語教育、中学校では「働き」を軸にした文の理解と発信を、高校では多読と文法の理解を進めるような学習形態・指導形態をとる必要がある。</li> <li>○ 文を書かせることはするが、まとまったものを伝えようとする文章レベルの訓練が不足している。</li> <li>○ 単なる基本的な日常会話ではなく、ディスカッションやディベートなど、より認知的に高度な作業、知的興味や関心に合った内容を授業に取り入れるべきである。</li> <li>○ なぜ文章を書くのかということを生徒にはっきり示すことが重要である。読んだことや議論したことに対して自分の意見を書こうという意欲をもったときに力が付くのではないかと。教員は文章を書かせるための指導法を身につける必要がある。</li> <li>○ ディベートなどで生徒の問題意識を掘り起こすことが、読んだり書いたりする意欲を引き出すことに結びつき有効である。英語は手段だという体験にもなる。</li> <li>○ 自己主張力や音声によるコミュニケーション能力、例えば、</li> </ul>

である。

- 都道府県・指定都市教育委員会等では、スピーチコンテスト等、中学生を対象として英語の授業以外で英語を使う取組を実施している例も見られる。

質問能力や内容を踏まえて自分がどう応答するかを中学校、高等学校でどのように指導していくべきか検討が必要である。

- 音声によるコミュニケーション能力には、応答的な要素と知覚運動的なスキルの要素があるが、応答的なコミュニケーションを活発にするためには、少人数であることが必要である。
- 授業以外で意欲を持って学ばせるためには、ある程度の時数を確保していないとできない。また、短期間に集中して行うなどのある程度の集中が必要である。
- 目的を持って書くという場合に、ディスカッションやディベートの用意のために書くということがあるので、音声と読み書きを別々に扱うのではなく有機的に結びつけるべきである。
- 科目を融合させて、トピックを設定して同じテーマで議論をさせたり、書かせたり読ませたりするという授業のやり方は非常に効率的である。
- 外国語の教員が異文化を重視することは、子どもたちが異質さに対して敏感になりすぎるという危険があるため、避けるべきことと考えている。むしろ、同質のものを探すという態度を育てるべきである。